

## 月例研究発表要旨

第146回、1990年7月4日に行われた三枝令子氏の研究発表「語の持つ意味と文の持つ意味——『だけに』の分析」の要旨は、本来第28巻に掲載すべきものでしたが、編集委員会はこれを失念致しました。深くお詫び致します。なお、その後三枝氏より、発表の内容は第27巻所収の論説「『だけに』の分析」と重複するため要旨掲載は不要との申し出がありましたので、これを省略致します。

第151回 1991年5月22日  
「山城の春」

新井皓士

もとより僕に詩趣を解する力などないし、泰西詩ともなれば更なる思いがするのだが、一篇の中世、いやルネサンス歌謡が奇妙に心にかかって、関連文献や伝記の類を漁り、作者の心と行動の軌跡をたどるうちに、宿願成就というのもちと大袈裟だが、南チロルの岩肌もあらわな山城の幾つかをたずねる機会を得た、そんなとりとめもない話が僕の報告であった。その折りは気恥ずかしさも手伝って、せわしい散文的説明に終始せざるをえなかったが、思い切ってここでは少し気取った形でその詩の一部を示し、お笑い草に供そう。

ついえけるかな、心の憂い。  
ザイス、フラック、高嶺の牧より、  
雪ぞ今しも融け消えゆかむ、  
かく、モスマイアーの語るを聞けば。

ゆるみ初めたる大地のけぶり、  
ふくらむ水音、嵩増す流れ、  
カステルルートゆ、イーザク峪へ。  
ハウエンシュタイン、わが城砦繞る  
森に聴こゆる、あの鳥この禽、  
さえずるしらべは喉よりあふれ、  
響きは正しく音階追うて、  
ドより上がりてラの音へ、  
それより下りて、はやファの音へ。  
数多の甘き小鳥のさえずり。  
朋友よ、こは喜びならずや。

消え去りぬるかな、心が苦しみ  
小夜啼鳥の妙なる初音を、  
マツェン耕地の鋤入れ追うて  
彼方にルルと囀る、聴けば。  
二羽また二羽と、輪を描き踊り、  
つがいは競うを、遠目にすれば。  
耕しおこせる高地農場、  
小鳥は引っ掻く大地の土くれ。  
うっそり冬におしこめられし者、  
凶つ世に押しひしがれし者、  
喜び迎えよ、緑の時節を、  
今し五月がもたらさむもの。  
汝いよしけものよ、あなぐらを出で  
草地をさぐれ、餌場をもとめよ。  
山も野も谷も今や萌え出ず、  
いましらの時は来たれり。

オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュ  
タイン (Oswald von Wolkenstein, 1376?  
-1445) はおそらく幼少時に右目を失った  
隻眼の騎士であり、およそ130篇の作品を  
残す歌謡詩人であった。生前に自ら二度、  
作品集を編む試みをなし浄書せしめた点す

で、なお手写本の時代にむしろ例外的な詩人であるが、領邦国家成立期の騎士身分としての生涯もなかなか起伏と波乱に富むものだった。近代の心情告白的な詩と同列に論ずることはできないにしても、詩編に個人的体験を反映する色彩がかなり濃厚であり、付記されたメロディや背景の風土・歴史など、知るほどに興味はつきないのである。

もっとも両詩集は構成が一樣ではなく、配列原理や個々の詩の成立年代に不明の点が少なくないので、一般には K. K. クラインの付した通し番号で作品を呼んでいる。僕の気になったのは、K116 と呼ばれるもので、1525 年成立の写本 (Hs. A) には含まれず、1532 年成立の写本 (Hs. B)、及び没後の成立が推定される写本 (Hs. C) に書き残されている。このことから成立の時期は一応その上限と下限がおさえられるし、一見させて憂哲もない、ドロミテ山地の春の訪れを歌っている、そしてその限りにおいて僕は最初、遠く万葉などにも通じそうな、純朴真率な喜びの発露に感じたのだが。

全体は三節よりなる。節と節との間に八行のルフランがある。この反復句が曲調といい文言といい、第 1、第 2 節とは対照的に騒々しく戦闘的ですからあるのだ。それに第 3 節、「義なる者」「名誉をしる者」は寿ぐべく、「正義こそ大なる宝」とくると、些か心騒ぎ、「天井の司牧クリストの殿」は断じて「たわけ」た御方 (narr!) ではない、御目を欺こうなどとする者はいずれ報いを、と結ばれ、やや興趣をそがれる感もあるのだが、言語上の障害 (古語や方言——といっても標準語など存在しないのだが——、不統一な書記法、固有名詞など) もあって、僕はしばらく第 3 節を棚上げして、山城の

春を空想場裏に楽しんでいたのであった。

オスヴァルトはおよそロマンティックな「詩人」のイメージにほど遠い、激しい性格と行動の主であつたらしい。ティロルのかなり有力な家門に連なるとはいえ、次男に生まれた彼は、十歳の年よりヨーロッパ各地を遍歴し辛酸を嘗めつつ、自力出世の道をはかり、時に兄と争い親族と争い、かつての恋人 (と目される女) の眷属と闘争を繰り返し、領邦君主を自認するオーストリア公フリードリヒに最後まで抵抗し帝国直属を求めたティロル貴族の一族であった。そして「わが城砦」ハウエンシュタインこそ、その所有権をめぐって二十余年来の抗争の因をなすものであり、最後の砦でもあった。私的な闘争の相手方が政治的闘争の相手方と手を結んだからである。

オスヴァルトは結局形の上ではこの闘争に破れ、フリードリヒ公に屈服する。コンスタンツに宗教会議が開かれた時以来、そのもとに伺候し諸用を務め後ろ楯を頼りにもした国王ジギスムント (皇帝戴冠 1533) は、オスヴァルト個人にとってもティロル貴族にとっても実効ある支援を与ええなかった。突兀として迫るザイスの山壁を背に、鬱蒼とした森林中の岩盤にはりついたハウエンシュタイン城に孤立して、1426 年から 1427 年にかけての冬を凌いだ (K44) 彼は、密かに逃亡を計って捕らわれ、護送され、5 年ほど前の屈辱を想いつつ再度の虜囚の身をかこつ (K26)。しかも彼は五月初め、存外寛大な条件で公に許され和解 (ウァフェューデ) するのである。兄ミハエルを始めとする有力な貴族の口添えもあろう、フリードリヒ公の政治的判断もあろう、公が乃公の唄や詩を惜しんだからだとオスヴァルト自身は自嘲気味に詠嘆して

いるが。

クライン 116 番の詩はこんな状況のもとで生まれたのだった。オスヴァルト等アンチ・フリードリヒ派が籠城し抵抗したグライフェンシュタイン、捕われのフォルスト、ファールブルク、兄の居城トロストブルク、そして家名の由来する本貫地ともいべきヴォルケンシュタインやハウエンシュタインなど古城〔趾〕を求めて、僕が南ティロルを駆けめぐったのは十月の末から十一月の初めにかけてだったが、既にドロミテの山々は雪を戴き、海拔千数百米にある山城は一息つく間にも足元から冷気が忍び寄るのだった。さてこそ春の喜びは、などと領いたのもつかの間、翌日は雪一色のカステルルートを辛うじて脱出しアイザック川添いに僕はブレンナー峠を目指したのである。

第 152 回 1991 年 7 月 3 日

「生成研究のめざすもの」

中野知律

1970 年代後半からこの十数年に渡って、生成研究 (*étude de genèse, études génétiques, critique génétique, la génétique*…) という名称を自らに与える研究論文が次々と現れてきた。genèse = 「ものを生産するのに貢献した要素や形の総体；またそれが形成される方法」という意味は 19 世紀半ばから用いられてはいるものの、「生成文法 *grammaire générative*」, 「遺伝学 *la génétique*」, 「発達心理学 *psychologie génétique*」など既に定着した語に比べると、文学における「生成研究」は語彙としてまだ新しく、また、体系化されつつある学の常として、生成研究に携わっていると

自認する研究者が各々この語に負わせている概念は細かい点で必ずしも一致しているわけではない。しかしながら、この語について一応の了解事項となっているのは、「作品を到達点によってではなく成立史によって理解しようとする立場」である。すなわち、生成研究とは、作品が出来上がるまで、いわゆる *manuscripts* の段階において、書かれたもの (*écrit*) が加筆、削除、その他のあらゆる修正によって新たに書き直される過程で生産された、*écrits* の積み重ねの中に、いわば作品の内的な堆積層を通して生起している、書くこと (*écriture*) のダイナミズムを明らかにすることをめざすものなのである。「書かれたもの」から「書くこと」そのものへ関心の対象を移して、書く行為とはいかなるものかを問う学であることを任ずる生成研究は、'60—70 年にかけて隆盛を誇った新批評 = 「読むこと」の学の後を受けて、文学研究に新しい風を吹き込もうとしている。

そうした視点は、各作家の草稿に実際にあたる作業の中から生まれてきたものであり、生成研究の理論化に努める研究者たちの多くはまた、*éditions* づくりを実践している人々でもある。草稿を扱う研究方法そのものは決して新しいものではない。作品の主題の発想源、社会的・歴史的事実との作品の関わり、他の作品との影響関係などの検証によって、いわば作品の外的 *genèse* を跡付けようとした、今世紀初頭の実証主義的文学批評は、最終稿 = 決定稿に至る草稿群を発掘・解説し *variantes* として処理する校訂版づくり *édition critique* の伝統を築きあげたのだった。しかし、校訂を充実させるべく *variantes* を網羅的に探索するうちに、決定稿に収斂するどころ

か、むしろその方向を逸脱した遠心力の強い variantes や、完成度からみて最終稿を凌ぐほどの versions の存在が確認されるようになって、求心的・因果律的・予定調和的な作品創造過程のイメージ、ひいては決定稿の概念そのものを問い直す必要性が意識されてきた。そうした問題提起をうけて生まれてきた生成研究は、旧来の実証的草稿研究が掘ってきた決定稿／草稿という優劣関係に染まった二項対立を退け、「個々の草稿、すなわち執筆が終了していない時期の作品の状態の一つ一つは暫定的にいて決定的なものである」という見方を提案する。生成の諸段階に現れるテキストの各々はそれに先立つテキストの崩壊とそれに続くテキストの誕生との均衡によりかかっており、「読み直し＝書き直し」とともに作者は一つのテキストを離れ、次のテキストに向かう。最終稿もこの écriture の潜在的生成のエネルギーを内包した（未然の）変貌可能体とみなすことによって、決定稿の纏っていた finalité（完成＝到達点としての最終段階）信仰を砕きながら、生成研究は、残されているすべての versions の中をたゆたう écriture の動きそのものが見てとれるような édition génétique をつくることを夢みるのである。

無限の書き直しの可能性が潜むテキストというイメージには、「テル・ケル」派やバルトラが提唱した、読みによって開かれる意味作用の際限のない発生・生成を宿す場としてのテキストという概念が投影されている。しかし、新批評が読者の側に開拓した意味形成性の終わりのない展開の概念を、書き手の側に移そうとしながら、生成研究は実のところ、あるためらいを意識している。ゴト＝メルシュの「いわゆる決定稿は

テキストの成立史の一段階に他ならない；おそらくは特権的な段階ではあろうが、最終的なものとは言い切れない」という言葉に表れている譲歩を解消する方向を生成研究は未だ見出ししていないのである。Fin という文字を書き付けることで écriture の運動のある時点で区切り、書かれたものに「作品」の枠を与えて出版にまわすという、段階の移行の「特権性」、生成のある段階を特権的に選択する書き手の作品化（あるいはその拒否）の意志をどう見積もるか。作者の「書き終える意志」と作品の関係を新たな角度から見なおすとともに、「書く」意識と実践の歴史の変遷および各作家における差異を、書物の生産・播布技術の問題と絡めて検討し直す試みが待たれている。

第153回 1991年10月16日

「シュニッツラー文学における  
小間使いについて」

井上修一

本号の『「輪舞」における人名と地名の役割』の中に発表の内容の大半が含まれているので省略。

第154回 1991年12月18日

「一橋以前——昔の人、昔の本」

山田泰司

私が中学校（旧制）に入学したのは、日本が太平洋戦争に入った年（昭和16年、1941年）の翌年の4月だった。そのころはまだ、英語は、数学、国語とともに重要科目のひとつと見なされていた。教科書は、

えんじ色の堅表紙のついた斎藤 静編 *Living English Readers* であった。この教科書の Book III にツルゲーネフの散文詩から的一篇の英訳 “The Sparrow” が載っていた。猟犬に襲われそうになった子雀を母雀が身を挺して救うという話であるが、“Love is stronger than death” という結びの文句が索漠とした様相を呈し始めていた時世にあって、ひときわ力強く響いたことを覚えている。また、学校で教わる英文法は通り一遍で物足りなかつたので、父の書棚の中に見つけた岡田実磨『英文法要諦』（書名は確かでない）によって知識欲を満足させた。紙は日に焼け、表紙ははずれそうになっていたが、用例が豊富で勘所を押えてある、よい参考書だった。

中学3年を終えたところで、海軍経理学校予科に入った。終戦の年、昭和20年の4月のことである。岡本圭次郎氏（戦後東京学芸大学教授）が文官長で、入江勇起男氏（戦後東京高師、のち東京教育大教授）と和田善太郎氏（戦後埼玉大教授）の両氏から教室で英語を教わった。教科書は三省堂の *Crown English Readers* で、各自自習用に『クラウン英和辞典』が貸与された。国語では万葉集と古今和歌集を習った。「石ばしる垂水の上のさ蕨の…」とか、「袖ひちてむすびし水のこほれるを…」といった和歌を知ったのは、この海軍の学校においてであった。

海経に入ってわずか4か月で敗戦となり、8月末には帰宅し、9月からもとの中学校の4年生になった。翌年2月の東京高等師範学校入試までの6か月間、父の書棚から色々の本を引っ張り出して読んだ。英語の本では、山田惣七訳注の George Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft*

（春、夏、秋、冬に分れた4冊本、青年英文学研究叢書、泰文社刊）の秋と冬の部を、受験勉強のつもりで読んだ。ギンシングのこの随想録は、その後毎年1回読み返す私の愛読書のひとつとなっている。受験といえは、高師英語科の試験にはオーラルテストがあるというので、Question and Answer 形式によるドリルの材料として、父が教えてくれた *Fifty Famous Stories* も忘れ難い。

東京高師生活は昭和21年9月、空腹のうちに始まった。戦時中は手に入らなかつたアメリカの新しい文学を読むには、進駐軍が放出する Armed Services Edition を古本屋で求めるのが便利であった。私もこの兵隊版で、ヘミングウェイ、スタインベック、コールドウェル、ウィラ・キャザーなどの小説を読んだ。3年生のとき、寺西武夫先生から *The Golden Treasury* の中に収められているロマン派の主な詩人たちの詩を教わった。そして、寺西先生の美しい朗読と明解な解釈によって、英詩の世界に引き込まれていった。またゴールデン・トレジャリーというアンソロジー自体にも興味を持った。ヴィクトリア朝の趣味に毒されているといわれるが、この上なく親しみ易いこの詞華集（初版は1861年）は、今でも『ヘンリー・ライクロフトの手記』とともに私の愛読書である。英詩に心引かれたので、休講のときには（そのころは実に休講が多かつた）、図書館でハーンの講義録、*On Poetry* と *On Poets* に読み耽った。

この時期に古本屋で見つけて熟読したのは、高垣松雄『英文の鑑賞と分析』（昭和8年、健文社刊）と石川林四郎『テニスの詩研究』（大正10年、研究社刊）であった。前者からは文体というものに興味をかき立てられ、後者からは英文学における訓詁の

学を学んだ。

東京文理科大学を受験するためには、英文学史の知識が不足していることを痛感したので、斎藤 勇氏の『英文学史』を信頼できる参考書として、この本に書かれていることは巻末の参考書目も含めて何もかも覚えてしまおうとした。その努力は無駄ではなかった。さらに英語の常識をつけるために父の書棚に見つけた *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* (初版 1870) を暇を惜んで読んだ。今、この本の第 14 版が私の机の上にある。

文理科大学時代では、西脇順三郎先生のことを記すにとどめたい。先生からは、古代・中世英語(厨川文夫氏のテキストで)と口語英語文体論の講義を受けた。どちらも先生の得意とされる分野の講義であったが、この大詩人から詩の話のを伺わずに終るのは惜しいということになり、特にお願いして、数回の講義を現代詩の講話に充てていただいた。それは先生のエッセーのごとく飄々として、しかも閃きのあるお話であった。

大学を卒業してから、2年近く(昭和 27 年 4 月から 29 年 1 月まで)、研究社から発行することになった月刊誌『英語教育』(主幹・福原麟太郎)の編集の手伝いをすることになり、原稿の依頼または受領のために多くの方々をお訪ねした。市河三喜、斎藤勇、西脇順三郎、野尻抱影(星の研究家、大仏次郎の兄)、勝俣銓吉郎、岩崎民平ほかの諸氏である。

弘前大学時代(昭和 30 年 4 月から 37 年 9 月まで)には、日下部正哉先生のお宅で、先生の下、毎日曜日の午前中、最初は I. A. Richards, *Practical Criticism*, 次いでシェークスピアの戯曲を読んだ。日下部先生は

Dover Wilson の New Shakespeare 版をお使いになり、私は Peter Alexander のコリンズの一冊本で *Onions, A Shakespeare Glossary* で下調べをして行って、先生の前で訳読するのだった。

第 155 回 1992 年 1 月 29 日

「認識の嘔吐 Erkenntnisekel」

森川俊夫

トーマス・マンの『トーニオ・クレーガー』に Erkenntnisekel という表現が出てくるが、辞書さえあればなんとかドイツ語が読めるという程度の学生でも、これを「認識の嘔吐」と訳すことは出来る。しかしそれがどういう意味かと問われて答えられる学生は、かなりの程度の読解力の持ち主の中でも稀である。

もちろんこの語は前後の脈絡なしに現れるわけではない。父王に対する母親の裏切りに気付いたハムレットの心情がまず描写されているのだから、この語が人間の、それも肉親の心理の壁に潜む醜悪なものを認識しての生理的反応を意味していることは、深読みするまでもなく明白である。しかし大方の学生は、この脈絡に気付かない。あるいはむしろ前後関係などに意義を認めず、「認識」一般から出発する。ただし「認識」一般に嘔吐を結び付けるには、非論理的芸当が必要である。しかし個別的なものを捨象してかかる方が、より純粹で高尚だと考える者にとって、非論理性は躓きの石ではないらしい。

このように、概念をその現実的前提、基盤から切り離し、概念の内包を無視するのは、ひとり学生に見られる傾向というわけ

ではなく、日本人の思考の平均的パターンではないだろうか。しかも実体のなくなった概念がなおも実体があるかのように扱われ、日本人の言魂信仰と呼応して呪術的な力を発揮したり、あるいは「建前」として、「本音」を隠蔽するアリバイの役割を果たしたりすることもある。たとえば日本国憲法の前文や第九条の精神はとくに空洞化しているにもかかわらず、すなわち保守党政府は憲法の平和主義を軍隊の創設によって無視してきたにもかかわらず、湾岸戦争の折には、憲法の「制約」によって「国際貢献」が果たせない、と弁解する。このように憲法を恣意的、便宜主義的に利用しながら周辺アジア諸国の「理解」を期待出来るはずもないし、地域紛争への日本の軍事的貢献を期待する諸国も日本に対する不信を拭えないであろう。もちろん同じ憲法状況下で自衛隊を海外に派兵すれば、国際的不信感は増大するばかりであろう。いずれにせよ、憲法九条があるのだから日本が平和主義から逸脱するはずがないというのは、きわめて独特な日本的発想ではあるが、まったく説得性のない主張である。

こうした非論理性も、無実体の概念の操作という思考作業から生じると考えられるが、さらに日本人の言語活動に窺われる、「理由づけ」が少ないという現象、ヨーロッパ諸言語と比べて少ないという現象も同じところに原因があるかもしれない。たとえば、ある提案に対して「時期尚早」だとして反対が唱えられ、反対の同調者が多数を占めて、提案が葬られるというのはよく見られる図である。ここで反対者は「時期尚早」が反対理由たりうると信じているが、「時期尚早」自体理由づけを要する表現であって、反対理由たりえないものなのであ

る。概念の内包や現実的基盤、あるいは表現の内容や意味に対するこのような無関心、無頓着の支配する言語風土に弁証法が馴染みにくいのは当然であろう。

この言語風土の中では、外来の概念が軽率に扱われても不思議ではない。たとえば、das Reich（とその合成語）が1970年代以降のほとんどすべての独和辞典で「帝国」と訳されるようになり、そのため「帝国大統領」(Reichspräsident) その他の診語が見られるが、das Reichは基本的には統一国家を意味していること、したがってヴァイマル共和国からヒトラー政権の崩壊までReichs-は、das Reichを構成する諸国＝地方(das Land, die Länder)に対する「中央」という意味で用いられるということ、これはすでに他の場所で指摘した。

その際、Nation, national, NationalismusしたがってまたNationalsozialismus,あるいはhuman, Humanismus, Humanitätの訳語にも問題があることを示唆しておいたが、Nationについて言えば、これは、Volkと同義語であって、生まれ、言語、文化を共有する人間集団をいい、日本語では「民族」、「国民」などと訳される。しかしこの概念は「国」の概念と不可分に結び付いてはいない。したがってNationalismusは「国家主義」ではあり得ず、「民族主義」ないしはせいぜい「国民主義」とすべきである。Nationalsozialismusの場合も同じく「民族(国民)社会主義」であって、「国家社会主義」ではない。

humanは「人間関係を重視、尊重する」という意味で、他者としての人間の存在を前提とする概念である。したがって、他者の存在を前提としないmenschlich(人間の、人間的)とは、意味構造がまったく違

っている。Humanismusは、神を中心とする世界観に代わる、「人間」を中心とする世界観である。そしてすべての人間は、いわばこのアイデアとしての「人間」の投影であり、アイデアとしての「人間」を媒体として連帯する。人間をそう考えれば、Humanismusは「人間主義」とすべきであろう。近世初期の運動としてのHumanismusを「人文主義」と呼ぶのはもはや止めようがないが、しかしだからと言って、特定の時代に結び付かないhumanを「人文的」と訳すのは乱暴である。またHumanitätは、トーマス・マンの用例(Menschenliebe)から、「人間愛」としたい。この訳語ならhumanの意味が生かされるからで、humanとはいささかのかかわりも感じられない「人間性」という、わが国で愛用されている語は、Humanitätの訳語としてはまったく不適切である。

第 156 回 1992 年 2 月 19 日  
「東京文化私観」

出口裕弘

「都市と文学」は、久しく私の身に親しい主題でした。フランス文学でいえば、ボードレールが詩人として生き死にの場とした第二帝政期のパリに、かなり長いことかかざらった憶えがあります。1850年代、60年代のパリは、皇帝ナポレオン三世と、セーヌ県知事オスマン男爵が手を組んで、一大改造事業を強行した時期です。この時代のパリを、現地踏査と資料調査の両面から、なんとか脳裡に再現してみることは、ボードレールの詩の世界を理解するためにも、ずいぶん役立ったと思っています。詩人口

ートレアモンについても、『マルドロールの歌』の「第六の歌」を中心に、パリの市街そのものから作品を読み解いてゆく作業を試みました。

東京という都市に対しても、ここ十数年、現地踏査と資料調査を車の両輪としながら、文学的考現学の一環として、意図的に「研究」の姿勢でかかわってきました。この世界的大都市は、いうまでもなく江戸という特殊な近世都市の基盤の上に成っているわけですが、変貌がはなはだしく、よほど精密な方法を用いて立ち向わなにかぎり、その基盤は見えてきません。

そこで、今の東京の地形や街路や水路を詳しく調べあげて、上に載っている建造物からはとうてい見極めのつかない「江戸」——あるいは「原東京」を、一つ一つ発見してゆく仕事が重要になります。東京が、どんな歴史を経て、どのような空間的条件のもとに、ジグザグ状に成立してきたか、それを一応、概観した上で、主として写真資料に依拠しながら、「昭和の東京」を振り返ってみたのが、定年退職を控えての、私のささやかな研究報告です。

私自身は、昭和三年に東京で出生した人間ですから、ほぼ、「昭和の東京」と共に生きてきました。地域としては、下町に根があります。東京は、昭和になる前、大震災で一度灰燼に帰しました。そして、ようやく近代都市の形を成しはじめたところで、昭和二十年、米軍機の空襲によって、ふたたび焦土となりました。およそ、町ぐるみ歴史記念館を成しているパリとは、比較のしようもない「変動」の都市です。その変転してとどまるところを知らない東京を、生来の下町人間の眼で、できるかぎり公平に観察し、解析してみたいというのが、現

在の私の、いちばん身に付いた研究課題です。そのへんの事情を、雑談風に喋らせていただきました。題目の「東京文化私観」は、坂口安吾が戦時下に発表した「日本文化私観」にならったもので、羊頭狗肉の感は拭えません。あらためて御清聴を感謝いたします。